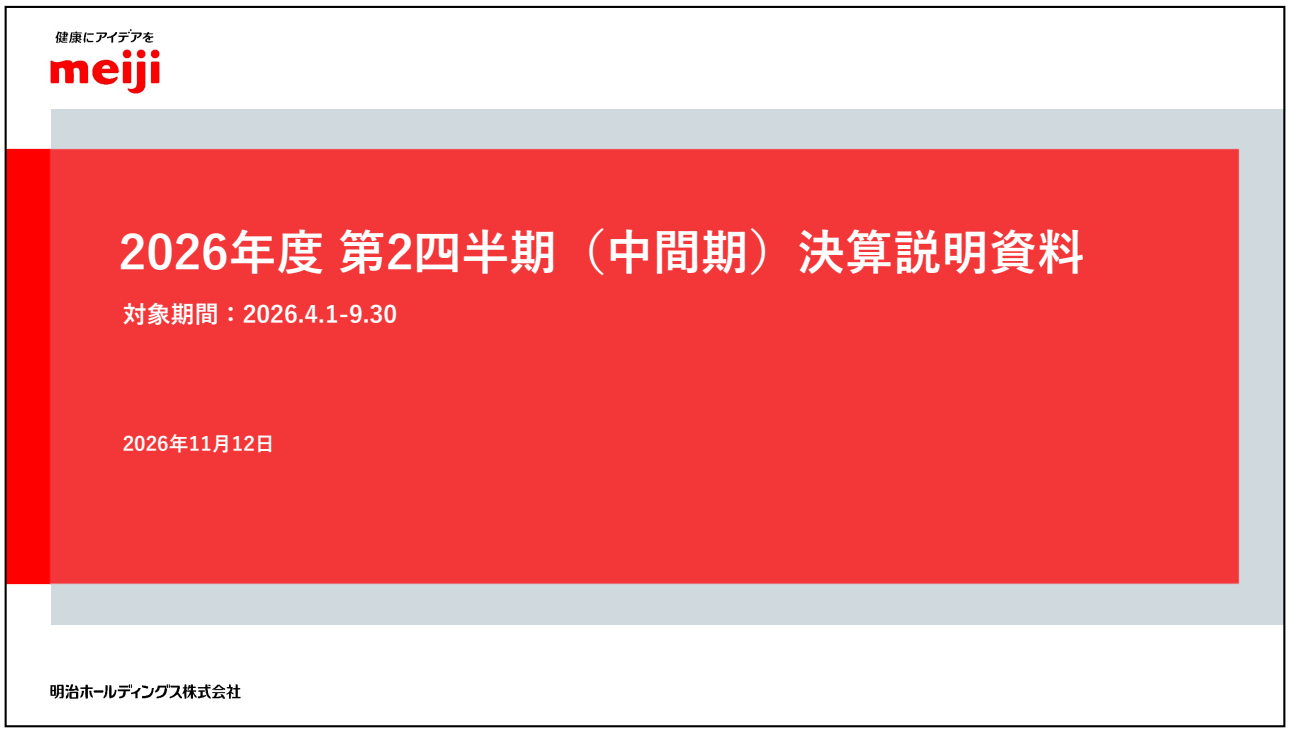


CEOの松田でございます。

本日はお忙しい中、ご参加いただき、誠にありがとうございます。

また、皆さまには日ごろからご支援いただき、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

目次

1．エグゼクティブ・サマリー

2．2026年度 上期総括

3．2026年度 下期・通期見通し

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

本日は、まず私から全体の総括をご説明いたします。

その後、CFOの菱沼から、上期決算の詳細と、下期および通期の見通しについて説明してまいります。

エグゼクティブ・サマリー｜上期総括

健康にアイデアを meiji

- **26年度上期の連結営業利益は計画超過**
  - **医薬品は計画を上回って大幅増益**
    →好調に推移した1Qの貢献に加えて、主力品の伸びによるプロダクトミックスの改善や、費用の期ズレが寄与
  - **食品は計画未達。構造改革やコスト低減効果は寄与したが、売上数量が乖離**
    →価格改定効果は計画以上に発現。プロバイオティクス、チョコレートは数量が好調に推移したものの、牛乳やアイスクリームが未達
    特にアイスクリームは国内・海外ともに課題。天候などの外部環境要因だけに終わらせず、下期は商品力強化にも取り組む
- **「大小を問わない構造改革の断行」という方針のもと、上期も着実に実行**
  <u>上期に決定した構造改革</u>
  ・中国デイリー・BtoB事業の譲渡（27年1月～）
  ・国内のアセットライト化：冷凍食品事業の終了（～27年3月末）、日本罐詰の譲渡（11月～）
  ・ジェネリック医薬品の環境変化に対応した医薬品共創機構の設立（共同出資、12月～）

2 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

まず、上期の総括です。

連結営業利益は478億円となり、計画を上回って着地しました。
このけん引役は医薬品です。好調に推移した第１四半期の実績が貢献したことに加え、第２四半期も主力品を中心に成長が続きました。また、研究開発費などの期ズレも利益を押し上げました。

一方、食品は計画未達となりました。構造改革の効果が発現したことに加え、プロバイオやチョコレート、また「ザバスミルク」も数量が計画以上で推移しましたが、付加価値品の上乗せ効果を期待した牛乳や、天候不順の影響をうけたアイスクリームが計画に届かず、ギャップとなりました。特に、アイスクリームは国内・海外とも苦戦しましたので、外部環境要因だけに終わらせず、下期は商品力を強化してテコ入れを図ります。

なお、これまでも「規模の大小を問わず、構造改革を進める」ことをお伝えしていましたが、スライドで示したとおり、着実に実行したことは上期の成果と捉えています。

エグゼクティブ・サマリー｜構造改革から成長の創造へ

健康にアイデアを meiji

- **通期営業利益の見通しは1,000億円を据え置き。ただし、セグメント下の事業別売上高・営業利益は、上期実績を踏まえて見直し**
  - **食品は、下期に発生する追加コストアップの影響を好調な主力品でカバー**
    →上期好調に推移した主力品の伸びに加え、追加的な価格改定やコスト低減、新商品投入を実施。コストアップ対策と成長戦略の両輪で通期利益計画の達成を目指す
  - **医薬品は、一部費用の期ズレなどを見込み、通期計画を維持**
- **400億円の自己株式取得を決定。事業戦略レビューによる投資厳選と資産圧縮の進展、足元の堅調なキャッシュ創出で原資が拡大。中計の株主還元方針に則った規律ある資本政策として、ROE向上と機動的な還元を両立することが目的**
- **引き続き、資本効率と競争優位性を重視した経営を推進**
  意思決定の迅速化と徹底した合理化で生産性を高め、ROE向上に向けて経営基盤を強化。将来の成長をけん引する次なる芽を育てる段階に移行していく

3 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

上期の結果を踏まえて、事業別には売上・利益ともに組み替えたものの、通期の連結営業利益見通しは1,000億円を据え置きました。

食品は、コストアップを乗り越えて、下期は期初計画以上の利益達成を目指します。上期好調だった商品のさらなる成長や新商品の投入、コスト低減に加え、追加の価格改定を検討しています。

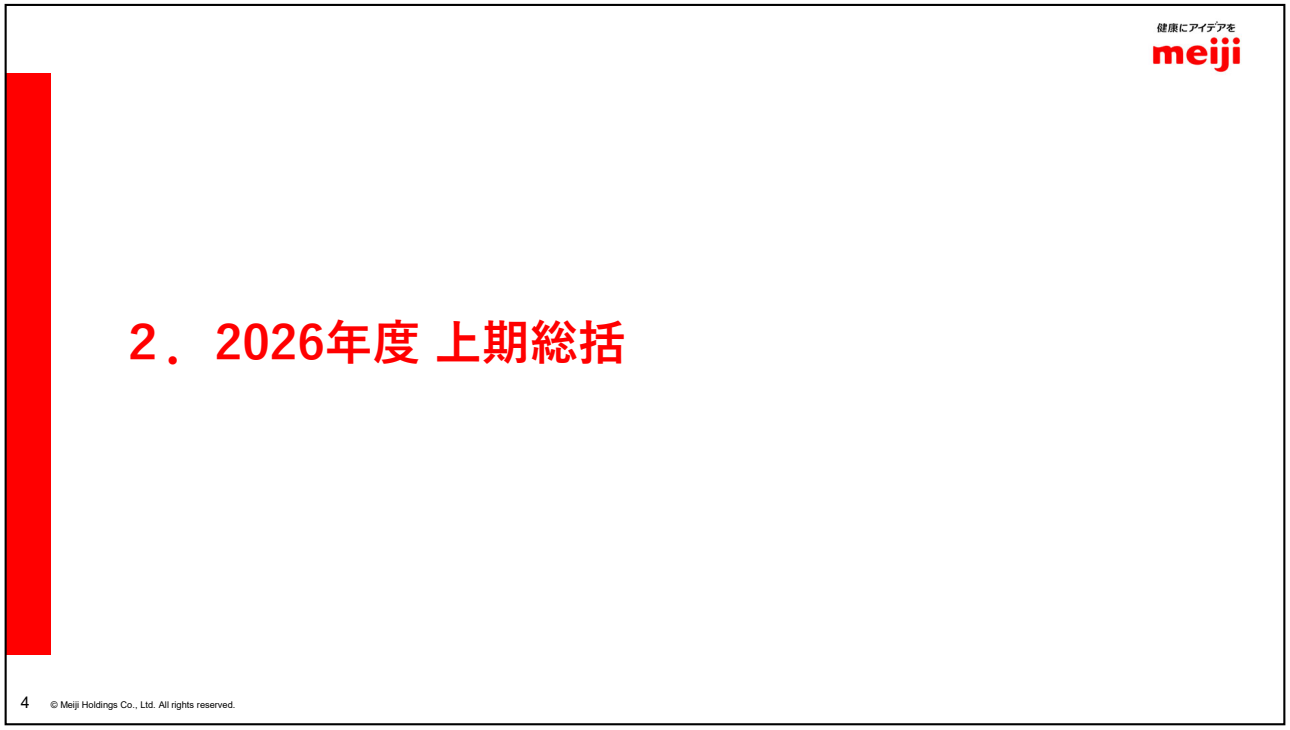
医薬品は、研究開発費の期ズレなどを織り込んで、通期計画を据え置きましたが、普及活動の強化により、「レズロック」や「ボルズィ」などは好調なトレンドが継続することを期待しています。

また、こうした足元の堅調さに加え、事業戦略レビューを踏まえた投資の見直しによってキャッシュ創出力も高まっていますので、26中計で掲げた株主還元方針に基づき、ROE向上と機動的な還元を両立させる目的から、このたび400億円の自己株式取得を決定しました。

これによって、今期のROEは8.2%となる見通しです。

引き続き、資本効率と競争優位性を重視した経営を推進し、意思決定の迅速化や徹底した合理化で、全社的な生産性の向上に取り組んでまいります。将来の成長をけん引する領域への経営資源配分を高め、構造改革から成長の創造へと軸足を移していきたいと考えています。

以上で私からの説明を終わります。ご清聴ありがとうございました。



CFOの菱沼です。
続いて、私からご説明してまいります。まず、上期決算についてです。

2026年度 上期連結決算のハイライト

（億円）

	1Q実績	前年同期比	2Q実績	前年同期比	上期実績	前年同期比	計画比	上期計画
売上高	2,894	+5.8% +158	3,089	+2.5% +76	5,983	+4.1% +234	+0.7% +38	5,945
うち、海外売上高	415	+13.6% +49	420	+3.6% +14	836	+8.3% +64	△5.0% △44	880
営業利益	226	+27.7% +49	252	+8.7% +20	478	+17.0% +69	+6.4% +28	450
営業利益率	7.8%	+1.3pt	8.2%	+0.5pt	8.0%	+0.9pt	+0.4pt	7.6%
親会社株主に帰属する四半期/中間純利益	152	+51.3% +51	137	+21.0% +23	290	+35.2% +75	+5.6% +15	275
ＥＰＳ	56.33円	19.06円	—	—	107.12円	+27.85円	+5.66円	101.46円

- **上期売上高は食品・医薬品ともに増収。食品は主力品が継続して伸長した一方、医薬品は1Qの貢献が大きい。計画比では食品がけん引して上回る**
- **上期営業利益は大幅増益。医薬品が1Q・2Qともに利益をけん引。食品は乳幼児ミルクやフローズンデザートの減収や海外乳原料高騰が続き、2Qの増益幅は限定的。計画比では医薬品が貢献して上回る**
- **中間純利益は大幅増益。持分法投資損益の改善が主な要因**

5 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

上期の連結売上高は5,983億円、前年同期比4.1％増となりました。

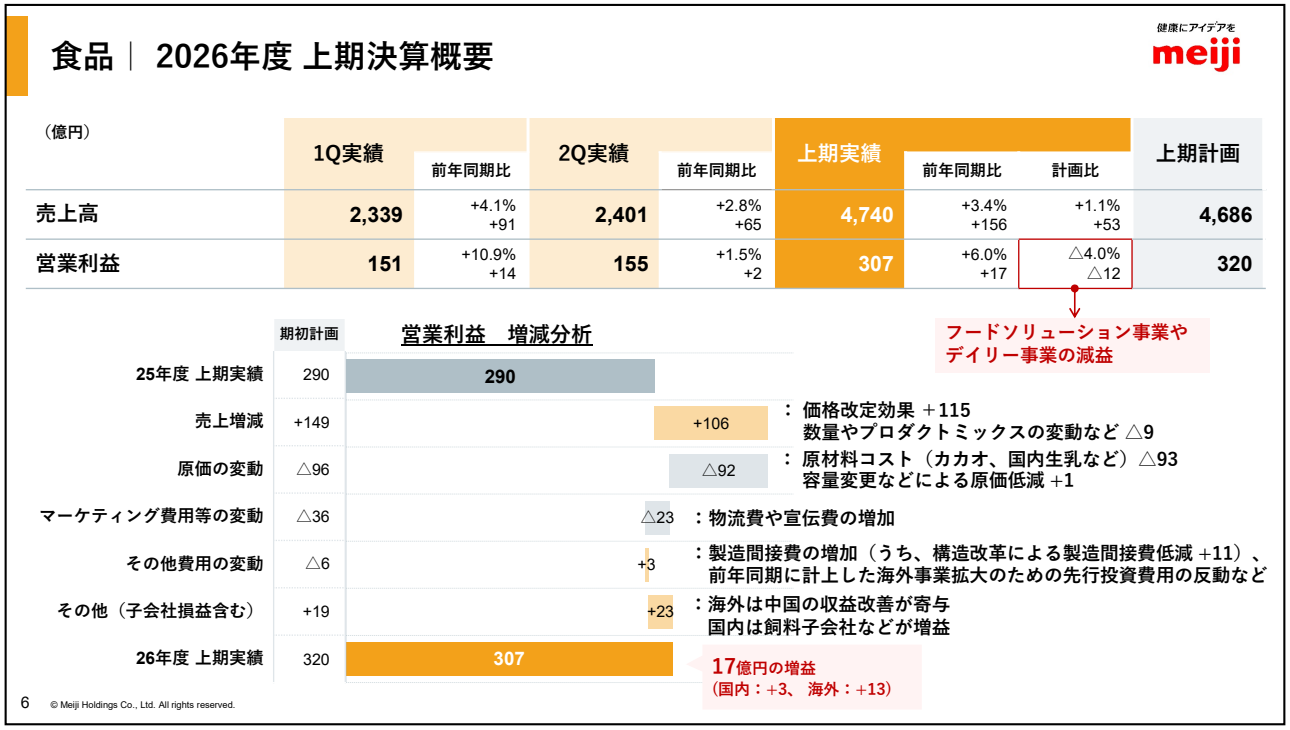
食品・医薬品ともに主力品の伸びが寄与し、第１四半期に続き、第２四半期も増収となりました。

続いて、連結営業利益は478億円で、17%増となりました。

医薬品は、第１四半期も第２四半期も大幅増益でしたが、食品は第１四半期に比べると、増益幅は限定的でした。

連結純利益は290億円で、35.2%増となりましたが、これは持分法投資損益が改善したことが主な要因です。

また、上期の期初計画比では、売上高は38億円、営業利益は28億円上回って着地しました。売上高は食品が、営業利益は医薬品が、それぞれ貢献した結果です。



続いて、セグメント別の概要です。

食品セグメントの売上高は4,740億円。前年同期比 3.4％増となりました。営業利益は6.0％増の307億円となり、国内・海外ともに増益となりました。

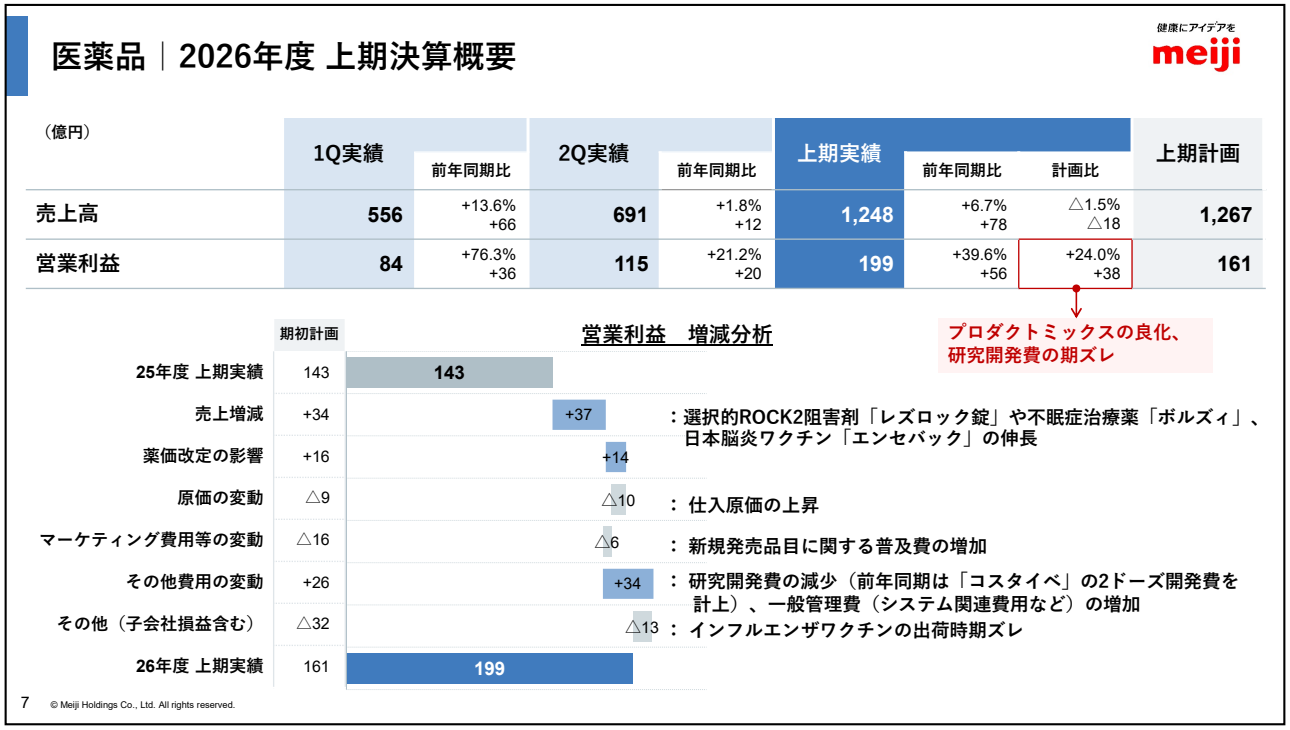
主な増減要因をグラフを用いてご説明します。

まず、大きな減益要素として、原材料コストが93億円増加しました。これに対し、価格改定のプラス効果は115億円、容量変更などの対策効果は1億円となりました。差額のマイナス9億円は、数量減やプロダクトミックスの影響です。

物流費やマーケティング費用などは23億円の減益要素となりました。その他費用の変動は、東北工場閉鎖などに伴う製造間接費の縮減効果が11億円あった一方で、 新工場の償却費負担増などがあり、全体では3億円の増益要素にとどまりました。

また、子会社損益は23億円の増益要素となりました。中国事業の収益改善などが寄与しました。

計画比では 12億円下回りました。「売上増減」の未達は、主にデイリーとフードソリューションが影響。「原価の変動」は計画内で推移しました。原材料コストの動向については後ほど詳しくご説明します。



続いて、医薬品セグメントです。

売上高は前年同期比 6.7％増の1,248億円、営業利益は39.6%増の199億円となりました。

グラフのとおり、「売上増減」の影響は、37億円の増益要素となりました。これは「レズロック」などの主力品が好調に推移したことが主な要因です。

薬価改定の影響は14億円の増益要素になりましたが、仕入原価の上昇を受けて「原価の変動」は10億円の減益要素となりました。

コスト面では、新規発売品目に関する普及費の増加などが、6億円の減益要素となった一方で、前年同期に計上した「コスタイベ」の２ドーズ品の開発費の反動も含めて、研究開発費が大きく減少したことなどが、34億円の増益要素となりました。

子会社損益は13億円の減益要素となりました。KMバイオロジクスで製造する「インフルエンザワクチン」の収率低下や、震災影響による出荷時期ズレなどが影響しました。

計画比では、38億円上回って着地しました。主力品の伸びがプロダクトミックスの改善につながったことや、研究開発費や普及費の発生時期が、一部下期にズレたこと、また、インドやタイの子会社が増益したことが主な要因です。

以上、上期決算についてご説明しました。

3．2026年度 下期・通期見通し

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

続いて、下期および通期の見通しについてです。

2026年度 下期・通期見通し｜売上高は修正、営業利益は据え置き

（億円）

		上期実績	前年同期比	下期計画（11月修正）	前年同期比	下期計画（5月当初）	通期計画（11月修正）	前期比	通期計画（5月当初）
連結	売上高	5,983	+4.1% +234	6,266	+4.6% +278	6,175	12,250	+4.4% +513	12,120
	営業利益	478	+17.0% +69	521	△0.5% △2	550	1,000	+7.2% +66	1,000
	親会社株主に帰属する当期純利益	290	+35.2% +75	334	+146.0% +198	350	625	+78.2% +274	625
食品	売上高	4,740	+3.4% +156	4,959	+2.4% +114	4,853	9,700	+2.9% +271	9,539
	営業利益	307	+6.0% +17	432	+8.9% +35	419	740	+7.6% +52	740
医薬品	売上高	1,248	+6.7% +78	1,316	+14.2% +164	1,326	2,565	+10.5% +242	2,593
	営業利益	199	+39.6% +56	130	△19.3% △31	168	330	+8.4% +25	330
HD／消去	売上高	△5	— △0	△9	— △0	△4	△15	— △1	△13
	営業利益	△28	— △4	△41	— △6	△38	△70	— △11	△70

- **当期純利益は据え置き。中国デイリー事業・BtoB事業や日本罐詰の譲渡および冷凍食品事業の撤退に伴う損失が発生するが、特別利益の計上を見込む**

9 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

上期の進捗を踏まえて、通期の売上高は1兆2,250億円の計画としました。食品は、主力品の伸びを反映するなどして上方修正した一方、医薬品は「血漿分画製剤」や「インフルエンザワクチン」を中心に引き下げた形です。

営業利益は1,000億円を据え置いており、期初にお約束した水準の達成を目指してまいります。

また、当期純利益も当初計画を据え置きました。中国事業の一部譲渡などに伴い、特別損失が発生しますが、政策保有株式の縮減を計画以上に進めることなどでカバーする見込みです。

なお、事業別には、売上も利益も、実態にあわせて見直しております。

食品｜通期計画の進捗

（億円）

		26年度 上期	前年同期比	26年度 下期	前年同期比	26年度 通期	前期比
営業利益	期初計画（5/14発表）	320	+10.3% +29	419	+5.7% +22	740	+7.6% +52
	上期実績 下期・通期修正計画（11/12発表）	307	+6.0% +17	432	+8.9% +35	740	+7.6% +52
	差	△12	—	+12	—	—	—

主な変動要因

- フードソリューション事業の減
→主に国内のフローズンデザートや中国アイスクリーム事業の未達
- デイリー事業の減益
→「おいしい牛乳」ブランドにおける付加価値品の売上未達

以下の下期取り組みを通じて、通期利益計画の達成を目指す

- 期初計画外の新商品の投入、価格改定・容量変更、コスト低減
- 商品・マーケティング戦略の強化
  - デイリー、カカオ、ニュートリション：主力品を中心に数量増トレンドを維持
  - フードソリューション：商品の見直しなどによる回復
- 中国デイリー・BtoB事業の譲渡（1月～）

→期初計画では譲渡は織り込まず

10 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

ここからはセグメント別に説明してまいります。まず食品セグメントです。

下期の営業利益は、上期未達の12億円を取り返していくことになります。ポイントは主に３点です。

まず１点目は、コストアップへの対応です。

期初計画にはなかった新商品の投入や、追加的な価格改定の実行、全社的なコスト低減を機動的に進めます。

そして２点目は、主力品の売上拡大です。

上期もプロバイオやチョコレート、「ザバスミルク」などは数量も好調に推移しました。足元でもこのトレンドは続いていますので、主力品には集中してマーケティング投資し、伸びを最大化したいと考えています。

一方、苦戦しているフードソリューション事業は、各カテゴリーで商品ラインアップを見直し、成長回復を目指します。

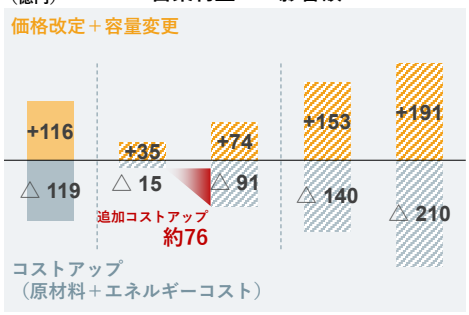
３点目は中国のデイリー事業とBtoB事業の譲渡です。これは、期初計画には織り込んでいませんでした。第４四半期には連結対象から外れる予定ですが、期初時点ではデイリー事業は赤字で組んでいましたので、計画比ではプラスに寄与します。

これらの３つのポイントに取り組むことで、通期ベースでは期初計画の営業利益をしっかりと確保できる見通しです。

食品｜コストアップへの対応

健康にアイデアを meiji

（億円）　営業利益への影響額



上期実績	[期初時点] 下期計画	[11月時点] 下期計画	[期初時点] 通期計画	[11月時点] 通期計画

〈主な価格改定〉

26年6月	ザバス（粉末・バー）	+6-28%
9月	高栄養食品 ザバス（粉末）	+5-10% +11-22%、容量変更
11月	チョコレート、スナック	+3-8%
12月	ザバス（ドリンク）	+6-11%

■ 上期の主なコストアップ

	カカオ	海外乳原料	国内生乳	油脂	チーズ	糖類	包材	その他
影響額	△41	△23	△14	△5	△2	△2	△1	△5
期初計画比	△4	△6	+13	△2	△2	△4	+9	+8

- 輸入原料は為替の影響で、全体的に計画以上のコストアップ
- 保守的に織り込んでいた包材の影響は一部に留まる。国内生乳の乖離は、牛乳の売上未達による使用量の差が影響

■ 下期の主なコストアップ

	カカオ	海外乳原料	国内生乳	油脂	チーズ	糖類	包材	その他
影響見込額	+23	△49	△4	△8	+1	+9	△32	△11
期初計画比	△3	△39	—	△7	△1	△2	△18	△2

- 海外乳原料と包材、為替のマイナス影響を追加で見込む
- 発表済み以外の商品でも価格改定を検討
- 独自技術や機能性、ブランド価値を活かした商品展開を強化し、付加価値品の構成比を向上
- 状況のタイムリーなモニタリング体制の構築と、コスト削減などの追加的な打ち手の検討および機動的な実行（JACとの協業による経営のスピードアップの一環）

11　© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

それでは、一番のポイントとなる「コストアップへの対応」からご説明いたします。

まず、上期の動向ですが、海外乳原料やカカオは、為替の影響も含め、10億円ほど計画以上に上昇しました。一方で、保守的に計画を組んでいた包材のコストアップは限定的でした。また、牛乳は付加価値品に注力して、数量もプロダクトミックスも改善する計画でしたが、その影響が「売上増減」のマイナス要因に、また生乳使用量が減少したことが「原価の変動」のプラス要因になりました。

続いて、下期の見通しです。グラフの左から２つめで示したとおり、下期のコストアップは、当初15億円の見通しでしたが、76億円増加し、91億円となる見通しです。主な要因は海外乳原料や包材で、上期以上に厳しくなる想定です。カカオや糖類は増益要因とはなるものの、為替の影響もあり、期初計画比では改善幅が限定的です。

これに対し、すでに一部商品では期初計画になかった価格改定を公表しており、今後、ほかの商品でも対応を検討しています。主力品はこれまで価格改定後も底堅く推移しており、価値に対するお客さまの評価の高さを再認識しています。こうした実績のもと、追加的な価格改定なども着実に実行していきます。

また、当初考えていた発売時期から前倒しするものを含め、独自価値のある新商品の投入も加速していきます。その一方で、費用対効果を精査しながら、コスト削減や業務効率化も進めてまいります。

こうした機動的な打ち手の背景には、状況をタイムリーに把握し施策を迅速に実行できる体制が徐々に構築されてきたこともあります。引き続きスピード感を持って対応し、営業利益740億円の達成確度を高めていきます。

食品｜事業概況　デイリー事業



健康にアイデアを meiji

左：「ヘモグロビンA1c対策ヨーグルト（ブルーベリー風味）」（112g）
希望小売価格：161円
右：「R-1 The GREEK」（112g）
希望小売価格：266円

（億円）

	上期実績	前年同期比	通期計画（11月修正）	前期比
売上高	1,368	+1.5% +20	2,785	+2.2% +59
うち、国内	1,346	+1.2% +16	2,737	+1.6% +43
海外	22	+22.6% +4	47	+46.9% +15
営業利益	133	+11.4% +13	285	△2.7% △7
うち、国内	145	+8.0% +10	305	△5.1% △16
海外	△11	— +2	△20	— +8

国内主力品の売上高（億円）

	上期実績	前年同期比（金額 / 数量）	通期計画（11月修正）	前期比
プロバイオティクス	457	+3.5%/+0.8%	979	△0.5%
ヨーグルト	422	+3.2%/△2.4%	801	+2.4%
市販・宅配牛乳	406	+0.5%/△3.3%	798	+2.2%

国内市場の前年同期増減率（上期）

- ヨーグルト（機能性含む）　+約6%
- 牛乳　+約1%

※（株）明治単体、収益認識基準適用前実績
※数量ベースの前年同期比はプロダクトミックスの効果も含まれる参考値

■ 国内

- プロバイオティクス
  - 上期は堅調。「R-1」（+0.8%）と「ヘモグロビンA1c対策ヨーグルト」（計画比1.5倍）がけん引
  - 好調な両ブランドともに10月に期初計画外の新商品を発売。「R-1 The GREEK」などラインアップ拡充で売上拡大
- 「ブルガリア」は競合との売価差が縮まり、上期は数量増。マーケティング強化で数量維持し、収益改善へ
- 牛乳は天候不順の影響もあって計画未達。収益力の安定化に向けて、付加価値品に引き続き注力
- 上期は価格改定効果により、原材料コストや物流費の増加を吸収し増益。下期は主力品の数量増を見込み、計画上乗せ

■ 海外（中国）

- 製造間接費や拡売費などの減少で赤字縮小。事業譲渡により、計上は3Qまで
- 前年発売の「明治おいしい牛乳」が伸長

12 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

ここからは、事業別にポイントを絞って説明してまいります。まずはデイリー事業です。

国内は、期初時点から通期は増収減益の計画でした。これは「R-1」の特需影響を除いたことが大きな要因であり、今回の修正計画にも含めていません。

実際には「R-1」は堅調で、新商品の「ヘモグロビンA1c対策ヨーグルト」は計画以上の推移を続けていますので、上ブレも期待できます。両ブランドとも、10月に発売した新商品も含めて、さらなる売上拡大を目指します。

一方、牛乳は、天候不順の影響もあって上期は計画未達でしたが、前年比では付加価値品のウェイトが高まってきたことや、生産体制の見直しによる効果で収益性が改善し、市販は黒字化が近づいています。引き続き、下期も付加価値品に注力していきます。

海外について、中国は減損の効果やコストコントロールによって赤字額が縮小しています。残る第３四半期も、着実に取り組んでまいります。

食品｜事業概況　カカオ事業

（億円）

	上期実績	前年同期比	通期計画（11月修正）	前期比
売上高	901	+13.8% +109	1,990	+6.5% +121
うち、国内	541	+12.9% +61	1,211	+3.8% +43
海外	359	+15.3% +47	778	+11.0% +77
営業利益	41	△14.8% △7	180	+18.3% +27
うち、国内	35	△25.6% △12	150	+3.9% +5
海外	5	— +5	30	+280.0% +22

国内主力品の売上高（億円）

	上期実績	前年同期比（金額 / 数量）	通期計画（11月修正）	前期比
チョコレート	525	+10.4%/+14.1%	1,270	+5.7%

※（株）明治単体、収益認識基準適用前実績
※ 数量ベースの前年同期比はプロダクトミックスの効果も含まれる参考値

国内市場の前年同期増減率（上期）

- チョコレート　+5-6%
- グミ　+2-3%





左：「生のとき なごり抹茶）」
右：「明治ミルクチョコレート」100周年ロゴ

健康にアイデアを
meiji

■ 国内

- チョコレート
  - 上期は「チョコレート効果」や板チョコ群、チョコスナックがけん引。商品力とマーケティング施策の相乗効果で数量拡大
  - 最需要期の下期は新商品を投入し、プロモーションも活性化。 減税前の買い控えリスクを想定し、2月までに売上最大化を目指す
- グミは新商品が寄与し増収。市場は成長期から安定期に徐々に移行しており、一層の差別化が成長のカギ。技術や機能、ブランド力など独自価値の創出に注力
- カカオ原料高が響いて上期減益。為替の影響は下期も続く。高付加価値商品の販売拡大に加え、SCM強化で機会損失を縮小し、増益を目指す

■ 海外

- 米国は、ホールセールチャネルでのチョコスナックの強い伸びが続く見通し。中国は「アーモンドチョコレート」や板チョコなどが好調
- 利益は全体では増益基調。米国は減価償却費の増加により減益だが、中国は大幅増益

13 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

続いて、カカオ事業です。

国内では、数量も好調だった上期に続き、下期もチョコレートの伸びに期待しています。期初計画にはない新商品も含めてラインアップを強化し、露出を拡大して活性化しつつ、11月実施の価格改定の定着に取り組みます。

利益面では、下期からカカオ原料が増益要因に転じます。

また、売上最大化の下支えとして、COO直轄プロジェクトとして進めているSCM強化の取り組みの成果も、上期から徐々に出てきています。サプライチェーンマネジメントを見直し、需給ギャップの最小化と機会損失の縮小に取り組んでいます。

この効果は計画には織り込んでいませんが、製販一貫した戦略での在庫配置などによって、売れ筋を欠品させない体制を整備することで、アップサイドにつなげていきます。

海外について、米国は、減価償却費の増加などで通期では減益ですが、トップラインは好調ですので、下期だけで見ると増益の計画です。中国は増収に加えて、減損の効果もあり、増益の計画です。

食品｜事業概況　ニュートリション事業

（億円）

	上期実績	前年同期比	通期計画（11月修正）	前期比
売上高	625	+2.0% +12	1,232	+3.7% +44
うち、国内	573	+2.3% +12	1,108	+2.7% +29
海外	51	△1.4% △0	123	+13.4% +14
営業利益	69	△5.8% △4	135	+0.1% +0
うち、国内	70	△4.7% △3	136	△1.3% △1
海外	△1	— △0	△1	— +1

国内主力品の売上高（億円）

	上期実績	前年同期比（金額 / 数量）	通期計画（11月修正）	前期比
乳幼児ミルク・流動食	326	△2.1%/—	643	△2.8%
スポーツ栄養	314	+10.9%/+8.2%	561	+4.7%

※（株）明治単体、収益認識基準適用前実績
※ 数量ベースの前年同期比はプロダクトミックスの効果も含まれる参考値

国内市場の前年同期増減率（上期）
- スポーツプロテイン（飲料）　+約25%



健康にアイデアを meiji

左：韓国では「ザバス ソイプロテイン」を中心に展開開始（店舗＋EC）
右：「ザバス BIOPRO（ブルーベリー風味）」（300mL）

■ 国内
- ザバス
  - 粉末は、金額・数量ともに上期5%以上の伸長。ターゲット層を絞って価値訴求する戦略が奏功。下期は減税前の買い控えリスクを想定し、商品ラインアップを拡充、プロモーションも強化
  - 飲料は2桁成長が続く。新商品の寄与や販促強化により、CVSを中心に高い伸び。下期も商品ラインアップを拡充予定
- 乳幼児ミルクはインバウンド縮小により減収。競合との売価差が縮まる中で、リニューアル品の普及に注力
- 流動食は価格改定の定着と数量回復に着実に取り組む
- 価格改定効果や構造改革によるコスト削減が奏功。下期も原材料コスト増への対策を講じ、増益を維持

■ 海外
- 上期は、ベトナムの乳幼児ミルクの減収を、台湾の乳幼児ミルクや高栄養食品がカバー
- 下期はベトナムの乳幼児ミルクを中心に増収を見込む

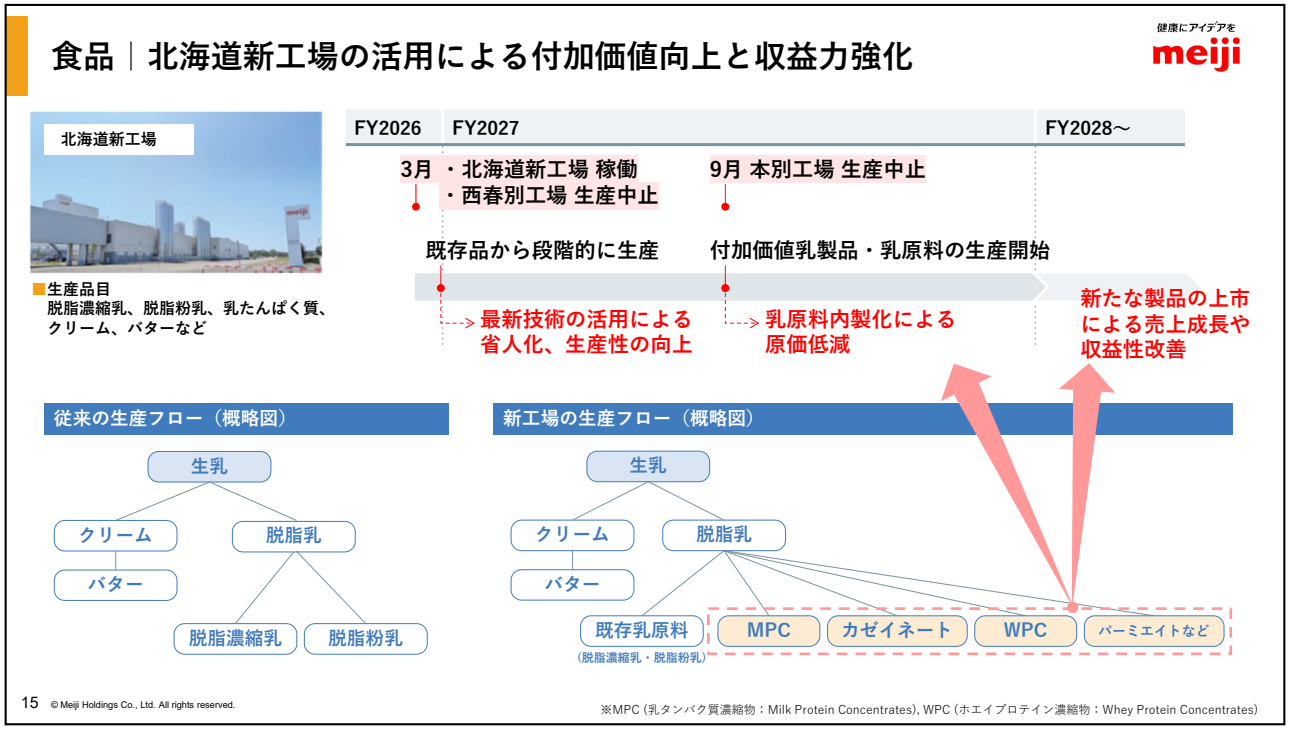
© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

続いて、ニュートリション事業です。

第１四半期の決算説明でもお伝えしたように、国内は「ザバス」の粉末タイプがようやく底を打って数量が伸びており、飲料タイプは引き続き２ケタ成長が続いています。

利益面では、ホエイを中心とする海外乳原料のコストアップが最大のリスクですので、価格改定や容量変更に加えて、期初計画になかった商品ラインアップの拡充に取り組む計画です。

そして、プロテインへの注目の高まりを背景に、グローバルでタンパク原料の需要が拡大しており、安定調達とコスト競争力の確保が重要な経営課題になっています。



こうした課題への対応策として、来年３月に北海道新工場が稼働します。

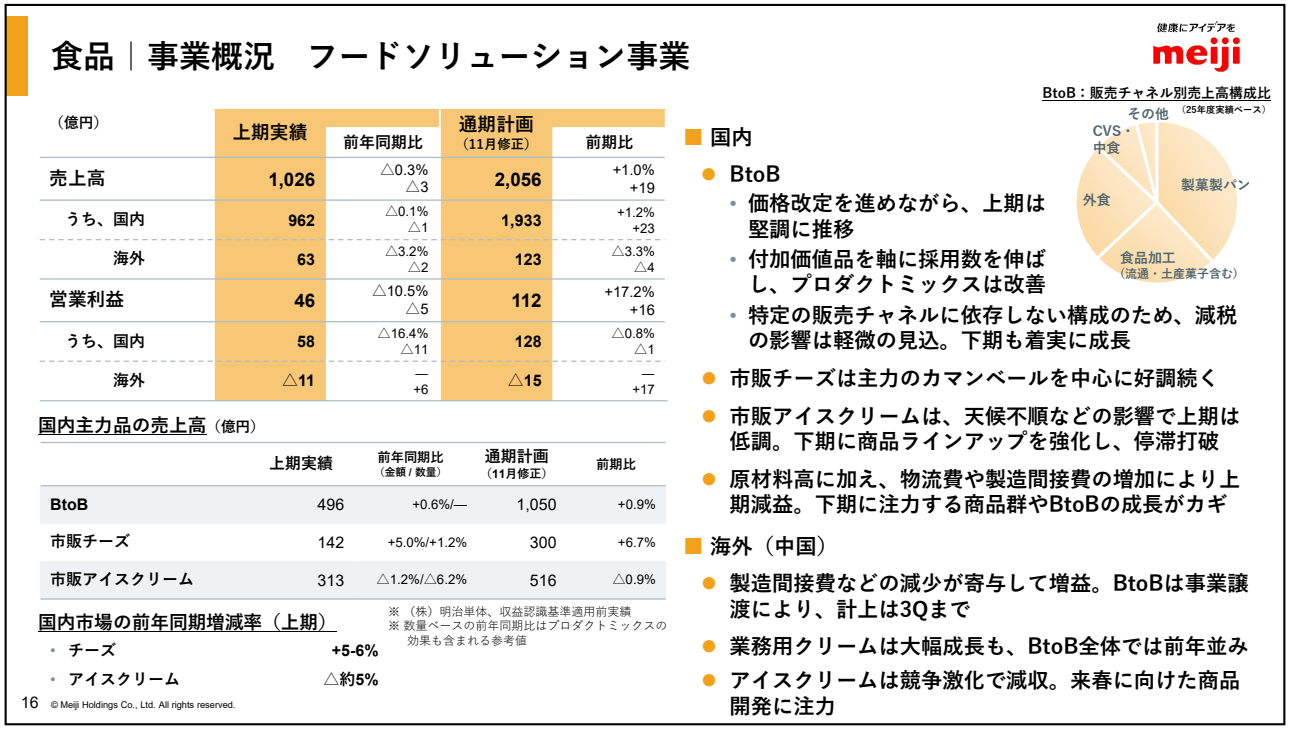
新工場は、２工場を再編・統合するもので、生産性の向上に加え、新たな付加価値乳原料の生産も可能にします。

スライドの左下の図は、従来の工場での生産フローです。生乳は多様な用途に展開できる素材で、現在は、クリームや脱脂濃縮乳、脱脂粉乳などを生産しています。

一方、右下の図は新工場での生産フローです。
従来品に加え、国内では唯一となる設備を活用し、MPCやWPC、カゼイネートといった原料を新たに生産します。

最新設備の導入で生産性を向上するとともに、これまで外部調達に依存していたタンパク原料を、一部ではあるものの、自社で供給できるようになります。まずは「ザバス」や流動食などに活用し、原価低減につなげていきます。

さらに、将来的には、これらの特長ある原料を使った新商品の開発や、乳原料として外販も視野に入れています。また、ハラル認証の取得を通じて、海外展開も強化する考えです。



食品｜事業概況　フードソリューション事業

健康にアイデアを meiji

（億円）

	上期実績	前年同期比	通期計画（11月修正）	前期比
売上高	1,026	△0.3% △3	2,056	+1.0% +19
うち、国内	962	△0.1% △1	1,933	+1.2% +23
海外	63	△3.2% △2	123	△3.3% △4
営業利益	46	△10.5% △5	112	+17.2% +16
うち、国内	58	△16.4% △11	128	△0.8% △1
海外	△11	— +6	△15	— +17

国内主力品の売上高（億円）

	上期実績	前年同期比（金額 / 数量）	通期計画（11月修正）	前期比
BtoB	496	+0.6%/—	1,050	+0.9%
市販チーズ	142	+5.0%/+1.2%	300	+6.7%
市販アイスクリーム	313	△1.2%/△6.2%	516	△0.9%

国内市場の前年同期増減率（上期）

- チーズ　+5-6%
- アイスクリーム　△約5%

※（株）明治単体、収益認識基準適用前実績
※ 数量ベースの前年同期比はプロダクトミックスの効果も含まれる参考値

BtoB：販売チャネル別売上高構成比（25年度実績ベース）

■ 国内

- BtoB
  - 価格改定を進めながら、上期は堅調に推移
  - 付加価値品を軸に採用数を伸ばし、プロダクトミックスは改善
  - 特定の販売チャネルに依存しない構成のため、減税の影響は軽微の見込。下期も着実に成長
- 市販チーズは主力のカマンベールを中心に好調続く
- 市販アイスクリームは、天候不順などの影響で上期は低調。下期に商品ラインアップを強化し、停滞打破
- 原材料高に加え、物流費や製造間接費の増加により上期減益。下期に注力する商品群やBtoBの成長がカギ

■ 海外（中国）

- 製造間接費などの減少が寄与して増益。BtoBは事業譲渡により、計上は3Qまで
- 業務用クリームは大幅成長も、BtoB全体では前年並み
- アイスクリームは競争激化で減収。来春に向けた商品開発に注力

16 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

続いて、フードソリューション事業です。

国内は、上期は苦戦しましたが、そのなかでもBtoBは堅調に推移しています。付加価値の高い商品群の引き合いが強く、プロダクトミックスの改善にもつながっています。

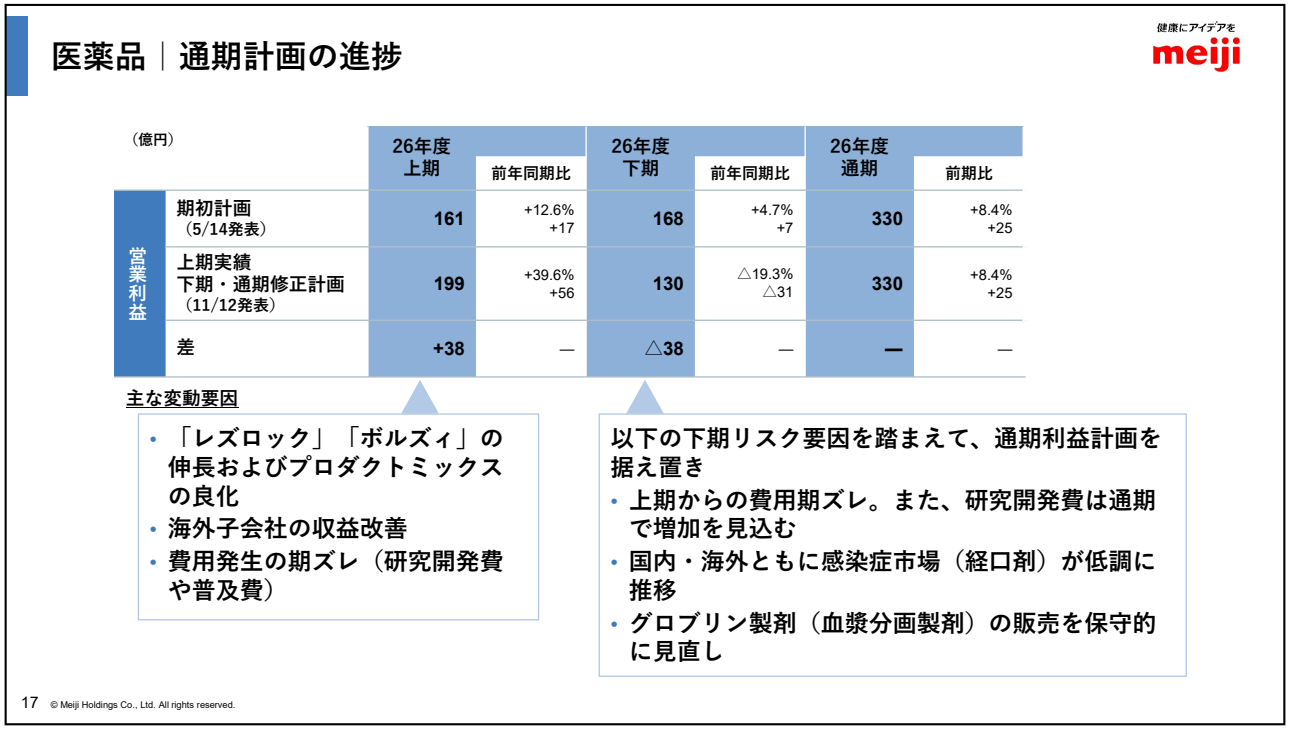
右上の円グラフはBtoBの販売チャネル別売上高の構成比です。ご覧のとおり、特定の販売チャネルに依存せず、バランスが取れています。外食産業への影響が懸念される消費減税についても、当社BtoB事業への影響は軽微と見込んでいます。下期は価格改定も含めて着実に売上を拡大し、利益もけん引する考えです。

一方、BtoCのアイスクリームは天候不順などの影響で、上期は足を引っ張る形になりました。下期は、計画外の新商品も含めて商品ラインアップを強化し、停滞感を打破していきたいと考えています。

そして、事業全体としては、宣伝費などのコストコントロールも実行し、下期の利益をしっかりと創出してまいります。

また、海外については、中国のBtoB事業は、デイリー事業と同じく第３四半期までの計上となります。アイスクリーム事業は、競争激化で上期は減収の結果となりました。第４四半期から次のシーズンが始まりますので、それに向けて商品開発に注力していきます。

以上、食品セグメントについてご説明いたしました。



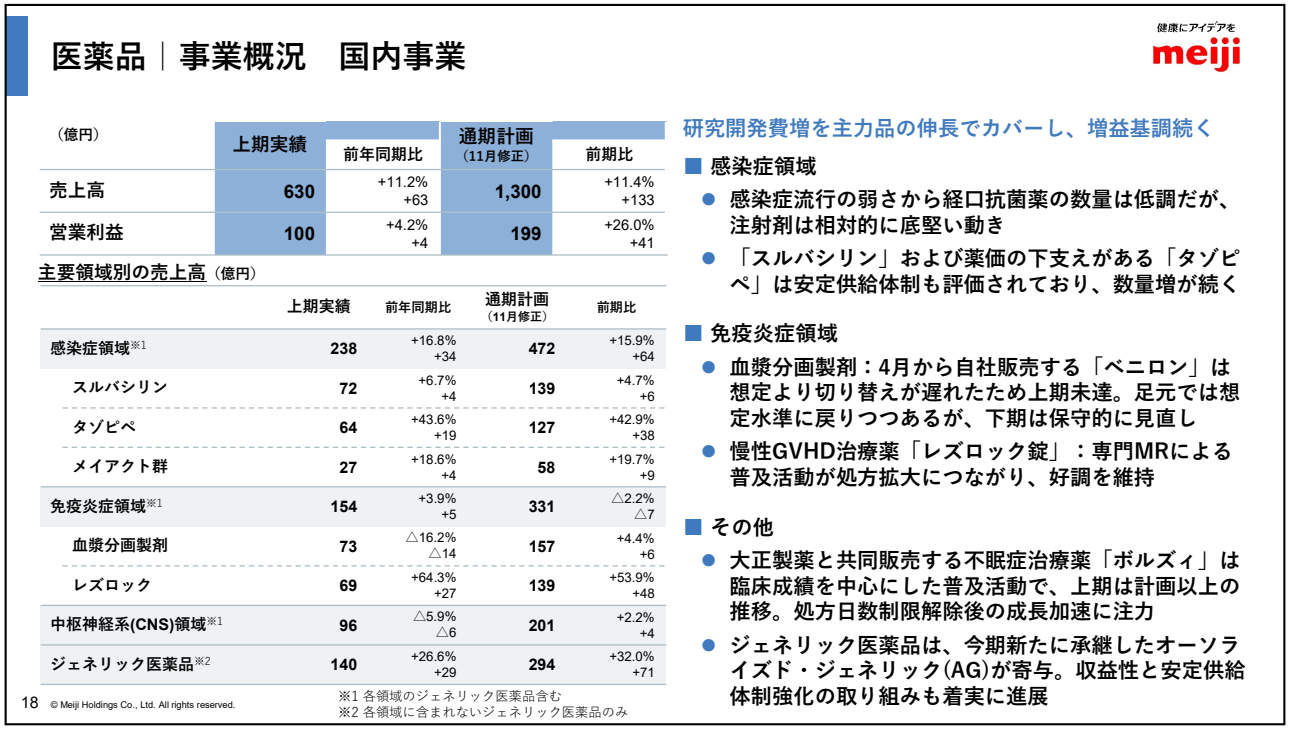
続いて、医薬品セグメントです。

上期は主力品を中心に好調に推移したことが増益に寄与しましたが、費用期ズレなども踏まえて、現時点では期初に設定した通期の営業利益 330億円を据え置きました。

上期からの期ズレ費用は、研究開発費と普及費がそれぞれ10億円程度です。また、研究開発費は、人件費を含めた諸費用の増加を踏まえて、通期で期初計画から15億円ほど増える見通しです。

そのほか、４月から自社販売するグロブリン製剤「ベニロン」など、一部製品は、上期動向を踏まえて、保守的に見直しました。

こうしたリスクを最大限織り込んでいますので、まずはこの計画を着実にクリアすべく取り組んでまいります。



医薬品｜事業概況　国内事業

健康にアイデアを meiji

（億円）

	上期実績	前年同期比	通期計画（11月修正）	前期比
売上高	630	+11.2% +63	1,300	+11.4% +133
営業利益	100	+4.2% +4	199	+26.0% +41

主要領域別の売上高（億円）

	上期実績	前年同期比	通期計画（11月修正）	前期比
感染症領域※1	238	+16.8% +34	472	+15.9% +64
スルバシリン	72	+6.7% +4	139	+4.7% +6
タゾピペ	64	+43.6% +19	127	+42.9% +38
メイアクト群	27	+18.6% +4	58	+19.7% +9
免疫炎症領域※1	154	+3.9% +5	331	△2.2% △7
血漿分画製剤	73	△16.2% △14	157	+4.4% +6
レズロック	69	+64.3% +27	139	+53.9% +48
中枢神経系(CNS)領域※1	96	△5.9% △6	201	+2.2% +4
ジェネリック医薬品※2	140	+26.6% +29	294	+32.0% +71

研究開発費増を主力品の伸長でカバーし、増益基調続く

■ 感染症領域
- 感染症流行の弱さから経口抗菌薬の数量は低調だが、注射剤は相対的に底堅い動き
- 「スルバシリン」および薬価の下支えがある「タゾピペ」は安定供給体制も評価されており、数量増が続く

■ 免疫炎症領域
- 血漿分画製剤：4月から自社販売する「ベニロン」は想定より切り替えが遅れたため上期未達。足元では想定水準に戻りつつあるが、下期は保守的に見直し
- 慢性GVHD治療薬「レズロック錠」：専門MRによる普及活動が処方拡大につながり、好調を維持

■ その他
- 大正製薬と共同販売する不眠症治療薬「ボルズィ」は臨床成績を中心にした普及活動で、上期は計画以上の推移。処方日数制限解除後の成長加速に注力
- ジェネリック医薬品は、今期新たに承継したオーソライズド・ジェネリック(AG)が寄与。収益性と安定供給体制強化の取り組みも着実に進展

※1 各領域のジェネリック医薬品含む
※2 各領域に含まれないジェネリック医薬品のみ

18 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

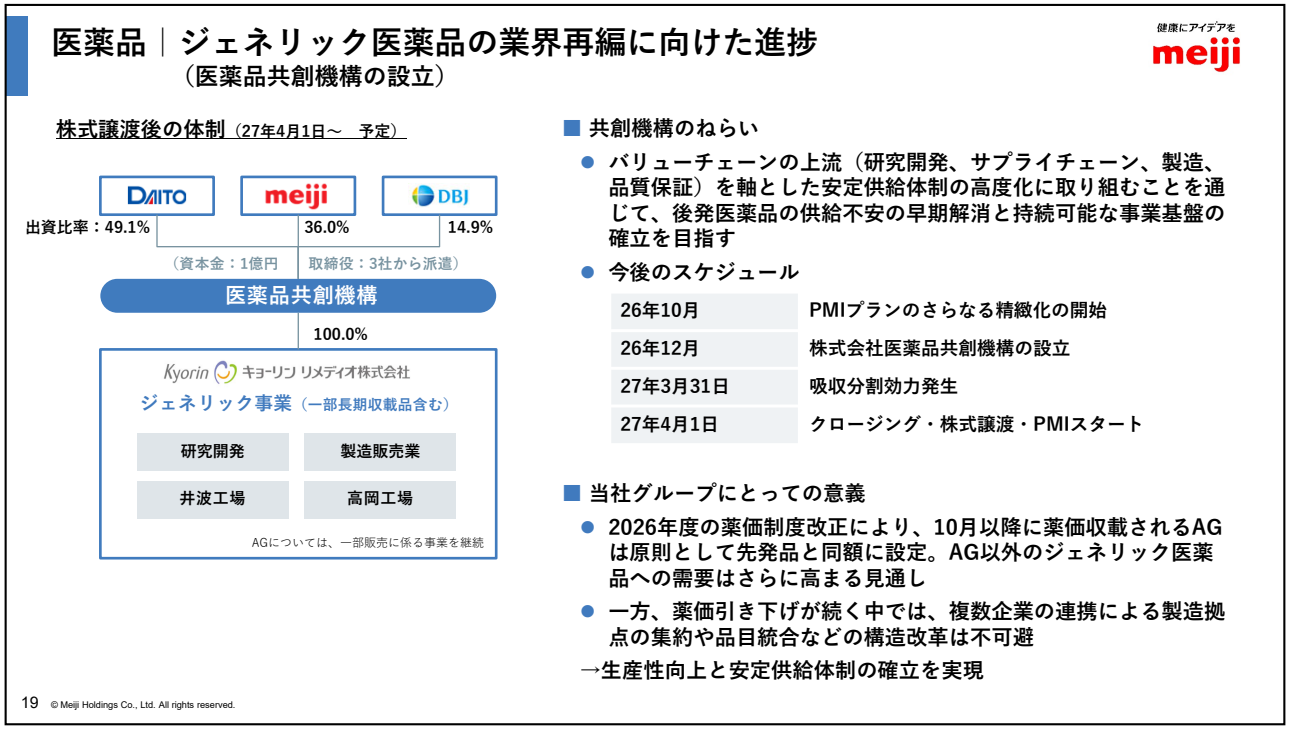
ここからは、事業別に説明してまいります。まずは国内事業です。

通期は、増収増益の計画に変わりはありません。引き続き、普及活動を強化して主力品を中心に伸ばしていくことで、研究開発費増をカバーし、利益成長を目指します。

下期計画については、グロブリン製剤「ベニロン」は、従来品の市場在庫が想定以上に残っていたため切り替えが遅れていることから、通期の計画を見直しました。また、感染症領域の売上も、感染症流行の弱さを踏まえて一部見直しています。

一方、「レズロック」や「ボルズィ」など、利益をけん引する品目群は好調を維持しており、プロダクトミックスの改善効果も続く見通しです。

また、ジェネリック医薬品については、他社と連携した構造改革を進めています。９月30日に開示したとおり、当社は、ダイトや日本政策投資銀行とともに医薬品共創機構を設立し、杏林製薬の後発医薬品事業を承継することを決定しました。



薬価制度改正によって、オーソライズド・ジェネリック以外のジェネリックは需要拡大が見込まれる一方で、生産性向上と安定供給の両立が業界共通の課題となっています。

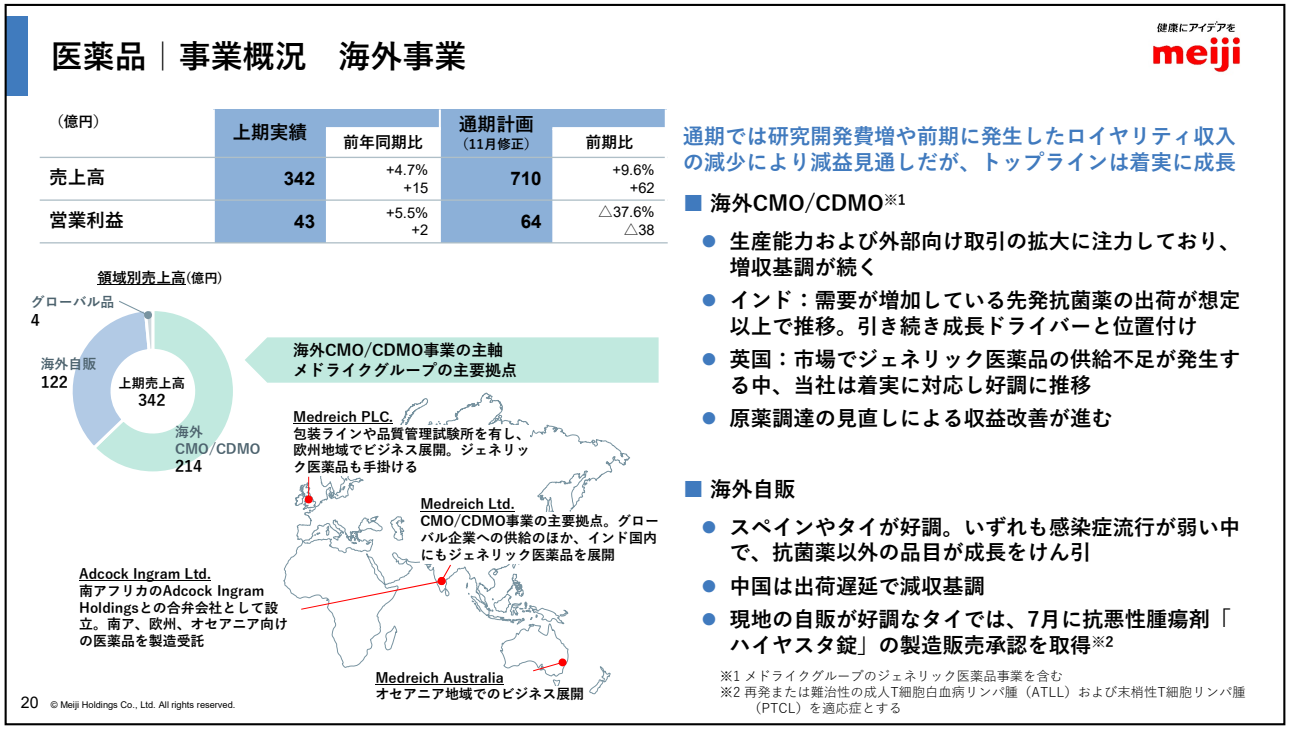
こうした課題に対して、１社単独ではなく他社と連携しながら、生産基盤や供給体制の強化を図ることが重要だと考えています。

現在、４月に向けてPMIプランの精緻化を進めており、キョーリンリメディオを加えた体制での、生産・品質・供給体制の最適化を検討しています。

なお、本件に伴う当社の資金負担は限定的で、業績やキャッシュフローへの影響は軽微です。

当社はこれまで、新薬系ジェネリックメーカーとして品質、安定供給、情報提供の各面で強みを培ってきました。また、販売機能や物流機能を別会社化し、それぞれの専門性と効率性を高めてきたことも特徴です。

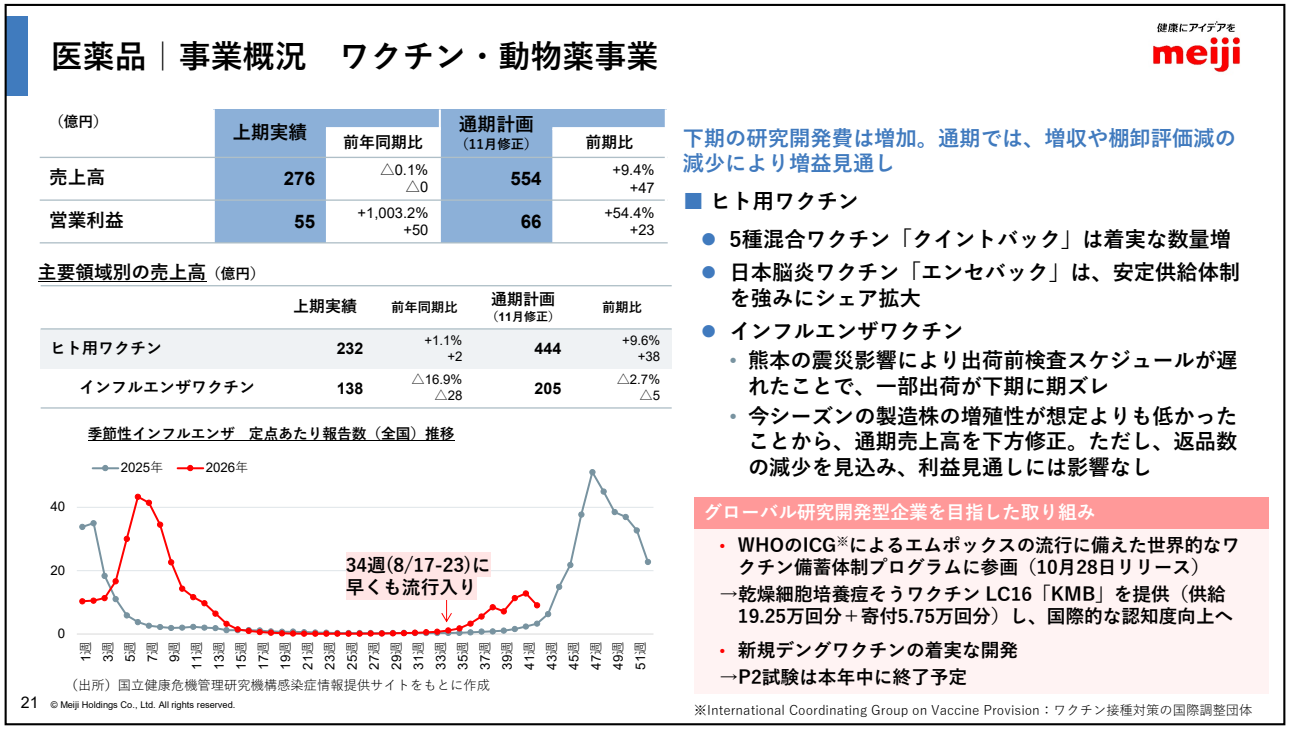
医薬品共創機構を通じて、こうした知見を活用するとともに、並行して進めている新・コンソーシアム構想も着実に進めることで、他社との連携による規模のメリットも取り込みながら、ジェネリック医薬品事業の競争力強化や収益性向上につなげていきます。



続いて、海外事業です。

CMO/CDMO事業は取引拡大の効果と為替の影響により、増収基調が続いています。特に、インド市場や英国市場での伸びが顕著です。また、原薬調達の見直しによって収益改善も進めています。引き続き、成長ドライバーの１つとして、安定的に伸ばしていく考えです。

自販事業は、中国での一部商品の出荷遅延もあって、全体では減収でしたが、スペインやタイは好調に推移しています。いずれも抗菌薬以外の品目が、導入品も含めて成長しています。７月にはタイで「ハイヤスタ」の承認を取得するなど、ASEAN地域は中長期的にポテンシャルのあるマーケットと位置付けていますので、体制強化も含めて取り組んでまいります。



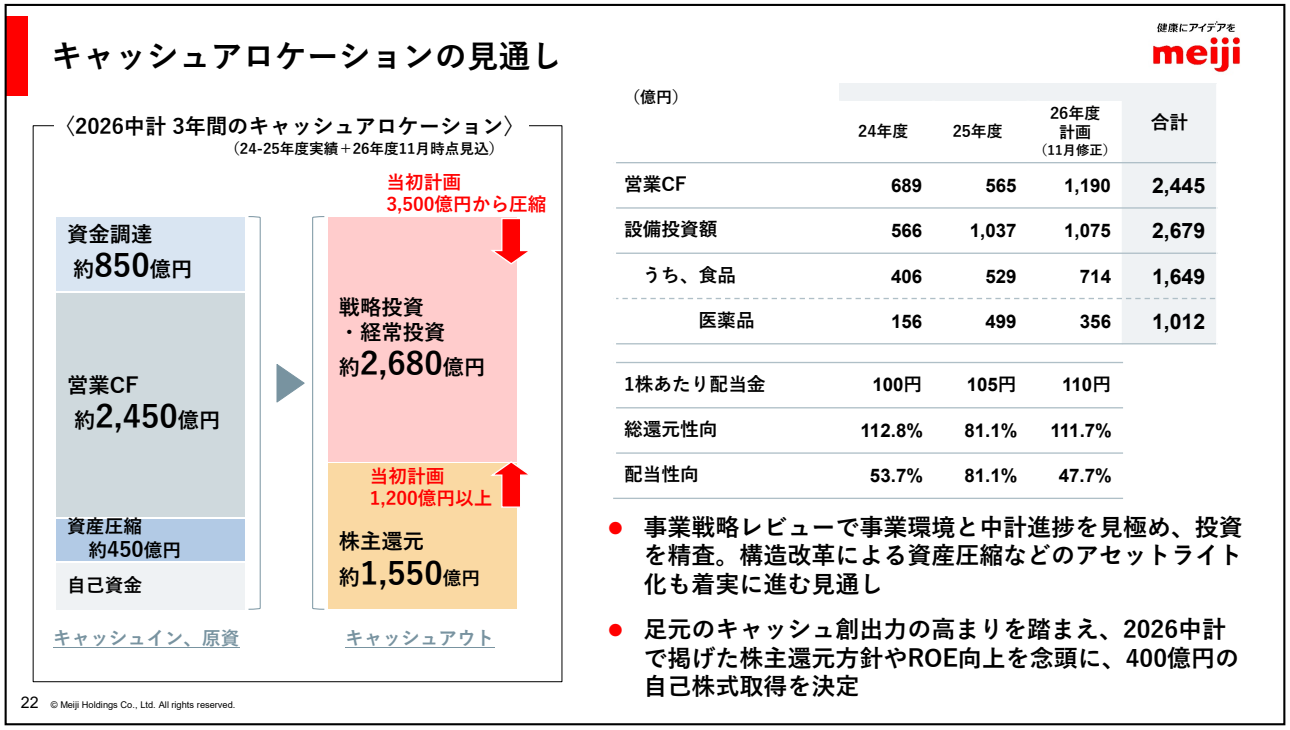
続いて、ワクチン・動物薬事業です。

インフルエンザワクチンの出荷は下期に期ズレしましたが、５種混合ワクチン「クイントバック」や日本脳炎ワクチン「エンセバック」などの着実な伸びでカバーしており、ヒト用ワクチン全体としては引き続き成長する見通しです。

インフルエンザワクチンについては、製造株の増殖性が想定よりも低かったなど、期初計画からの乖離が発生していることもあり、通期の売上は減収計画に見直しました。ただし、返品数の減少も見込んでいますので、利益見通しには影響ありません。

また、エムポックスワクチンについては、このたび世界的なワクチン備蓄体制プログラムに参画することとなりました。本件による業績影響は限定的ですが、国際機関との連携を通じて、当社ワクチンの信頼性や認知度の向上につながるものと考えています。また、将来的なグローバル市場へのワクチン展開の可能性を広げる観点からも、意義のある取り組みと捉えています。

以上、医薬品セグメントについてご説明いたしました。



最後に、資本政策と財務戦略についてご説明します。

右の表のとおり、今年度の営業キャッシュフローは、期初計画から160億円引き上げ、1,190億円の見通しです。食品・医薬品ともに主力品が好調で、原料確保も落ち着いてきたことなどから、足元でキャッシュ創出力が高まっています。一方、設備投資は、事業戦略レビューを踏まえて投資を見直し、期初計画からは215億円減少する見通しです。

24年度と25年度の営業キャッシュフローは低調で、計画から乖離しましたが、26年度以降は回復し、しっかりとキャッシュを創出できる見通しであります。こうした状況を踏まえ、株主還元方針に則った規律ある資本政策の一環としてROE向上も念頭に、このたび400億円の自己株式取得を決定しました。

左の図は、これらを踏まえた中計３年間のキャッシュアロケーションです。

投資総額は、当初計画の3,500億円規模から約2,680億円に圧縮する一方、営業キャッシュフローに加え、アセットライト化の取り組みから創出したキャッシュを原資に、株主還元は1,550億円規模となる見込みです。

2026年度計画

健康にアイデアを meiji

（億円）	25年度 通期実績	26年度 通期計画 （11月修正）	前期比
明治ROESG	6.1 pt	7.8 pt	+1.7 pt
売上高	11,736	12,250	+4.4% +513
うち、海外売上高	1,613	1,780	+10.4% +167
営業利益	933	1,000	+7.2% +66
営業利益率	7.9%	8.2%	+0.2 pt
親会社株主に帰属する当期純利益	350	625	+78.2% +274
EPS	129.42円	230.61円	+101.19円
1株当たり配当金	105円	110円	+5円

（億円）	25年度 通期実績	26年度 通期計画 （11月修正）	前期比
総還元性向	81.1%	111.7%	+30.6 pt
配当性向	81.1%	47.7%	△33.4 pt
ROE	4.6%	8.2%	+3.5 pt
ROIC	7.8%	8.0%	+0.2 pt
設備投資額	1,037	1,075	+3.7% +38
営業CF	565	1,190	+110.5% +624
フリーCF	△538	180	— +718

23 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

これらの取り組みの結果、今期のROEは期初計画の8.0%を確実にクリアし、8.2%となる見込みです。

冒頭の、松田からのコメントのとおり、ROEを最重要指標とし、引き続き資本効率と競争優位性を重視した経営を推進してまいります。

以上、下期・通期の見通しについてご説明いたしました。

この後は、皆さまからのご質問にお答えしていきたい思います。
ご清聴、ありがとうございました。

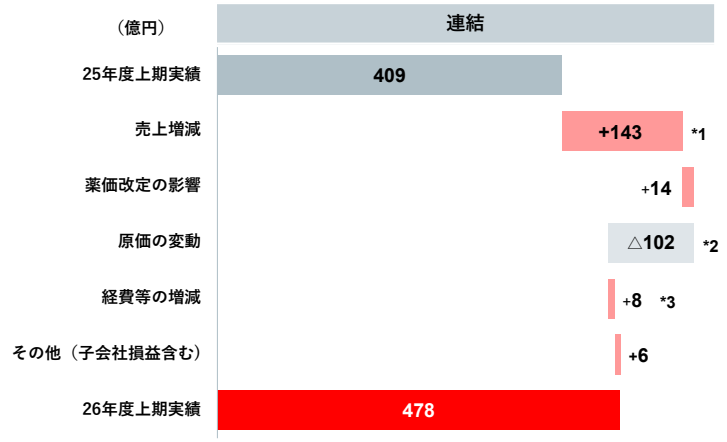
健康にアイデアを
meiji

参考資料

 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

健康にアイデアを
meiji

2026年度 上期　連結営業利益増減分析



	食品	医薬品	他
25年度上期実績	290	143	△23
売上増減	+106	+37	—
薬価改定の影響	—	+14	—
原価の変動	△92	△10	—
経費等の増減	△20	+29	—
その他（子会社損益含む）	+23	△13	△4
26年度上期実績	307	199	△28

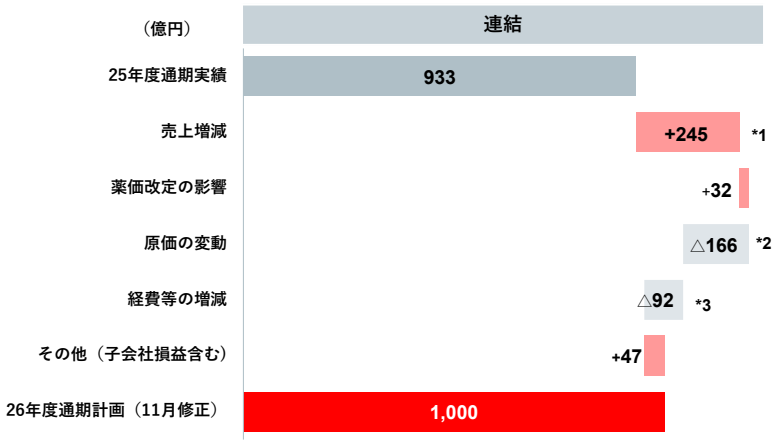
*1：　価格改定効果を含む

*2：　主な内訳　【食品】　原材料コスト増（カカオ、国内生乳など）△93
その他（容量変更など）+1
【医薬品】　仕入原価の上昇△10

*3：　主な内訳　【食品】　マーケティング費用等の変動△23、その他費用の変動+3
【医薬品】　マーケティング費用等の変動△6、その他費用の変動+34

 © Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

2026年度 通期　連結営業利益増減分析



	食品	医薬品	他
25年度通期実績	687	304	△59
売上増減	+210	+36	—
薬価改定の影響	—	+32	—
原価の変動	△149	△17	—
経費等の増減	△58	△33	—
その他（子会社損益含む）	+50	+8	△11
26年度通期計画（11月修正）	740	330	△70

*1：　価格改定効果を含む

*2：　主な内訳　【食品】　原材料コスト増（カカオ、国内生乳など）△164
　　その他（容量変更など）+15
　　【医薬品】　仕入原価の上昇△17

*3：　主な内訳　【食品】　マーケティング費用等の変動△36、その他費用の変動△22
　　【医薬品】　マーケティング費用等の変動△2、その他費用の変動△32

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

食品｜2026年度 上期　事業別営業利益 増減分析

（億円）

	食品全体	デイリー	カカオ	ニュートリション	フードソリューション	その他
25年度上期営業利益	290	120	48	73	52	△4
売上増減	+106	+38	+44	+5	+20	△0
原価の変動	△92	△16	△48	△7	△20	△1
経費等の増減	△20	△8	△9	△3	△11	+10
マーケティング費用等の変動	*△23*	*△12*	*△5*	*△1*	*△6*	*+1*
その他費用の変動（内、研究開発費）	*+3 (△2)*	*+4*	*△4*	*△1*	*△5*	*+9*
その他（子会社損益など）	+23	△0	+6	+1	+5	+12
26年度上期営業利益	307	133	41	69	46	16

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

食品｜2026年度 下期　事業別営業利益 増減分析

（億円）

	食品全体	デイリー	カカオ	ニュートリション	フードソリューション	その他
25年度下期営業利益	397	172	104	61	43	15
売上増減	+103	+14	+19	+44	+25	+1
原価の変動	△57	△22	+9	△40	△4	+1
経費等の増減	△38	△16	△11	△1	△11	+0
マーケティング費用等の変動	*△13*	*△5*	*△5*	*+3*	*△4*	*△2*
その他費用の変動（内、研究開発費）	*△25 (+2)*	*△10*	*△5*	*△4*	*△7*	*+2*
その他（子会社損益など）	+26	+2	+17	+2	+12	△7
26年度下期営業利益（11月修正計画）	432	151	139	65	65	10

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

食品｜2026年度 通期　事業別営業利益 増減分析

（億円）

	食品全体	デイリー	カカオ	ニュートリション	フードソリューション	その他
25年度通期営業利益	687	292	152	135	95	11
売上増減	+210	+52	+63	+49	+45	+1
原価の変動	△149	△38	△39	△47	△24	△1
経費等の増減	△58	△24	△19	△4	△22	+11
マーケティング費用等の変動	*△36*	*△17*	*△10*	*+1*	*△10*	*△0*
その他費用の変動（内、研究開発費）	*△22 (△0)*	*△6*	*△9*	*△5*	*△12*	*+11*
その他（子会社損益など）	+50	+2	+23	+3	+17	+5
26年度通期営業利益（11月修正計画）	740	285	180	135	112	27

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

食品｜2026年度　海外事業概況

健康にアイデアを meiji

■ 地域別

（億円）

		26年度 上期実績	前年同期比	26年度 下期計画（11月修正）	前年同期比	26年度 通期計画（11月修正）	前期比	26年度 通期計画（5月当初）
中国	売上高	136	+12.7% +15	177	+9.7% +15	313	+11.0% +31	330
	営業利益	△15	— +19	4	— +30	△10	— +49	△8
アジア	売上高	187	+31.6% +44	176	△5.9% △11	363	+10.3% +33	347
	営業利益	7	△18.3% △1	9	+139.2% +5	17	+27.7% +3	16
欧米	売上高	212	+8.4% +16	212	+3.0% +6	424	+5.6% +22	422
	営業利益	6	△28.3% △2	12	+9.5% +1	18	△6.9% △1	21
海外計	売上高	493	+11.0% +48	576	+10.8% +56	1,070	+10.9% +105	1,087
	営業利益	△20	— +13	12	— +36	△8	— +50	1

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

食品｜2026年度　海外事業概況

健康にアイデアを meiji

■ 中国事業

（億円）

	26年度 上期実績	前年同期比	26年度 下期計画（11月修正）	前年同期比	26年度 通期計画（11月修正）	前期比	26年度 通期計画（5月当初）
売上高	136	+12.7% +15	177	+9.7% +15	313	+11.0% +31	330
デイリー	20	+23.5% +3	24	+88.8% +11	44	+51.9% +15	49
カカオ	58	+26.9% +12	90	△1.9% △1	149	+7.6% +10	148
ニュートリション	0	— +0	0	— +0	0	— +0	0
フードソリューション	57	△1.6% △0	62	+10.8% +6	119	+4.5% +5	133
営業利益	△15	— +19	4	— +30	△10	— +49	△8
デイリー	△7	— +3	△4	— +5	△11	— +9	△16
カカオ	0	— +8	8	— +10	9	— +18	7
ニュートリション	△0	— +1	△0	— +1	△0	— +2	△0
フードソリューション	△8	— +6	0	— +12	△8	— +18	0

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

食品｜2026年度　主力品の売上高

（億円）

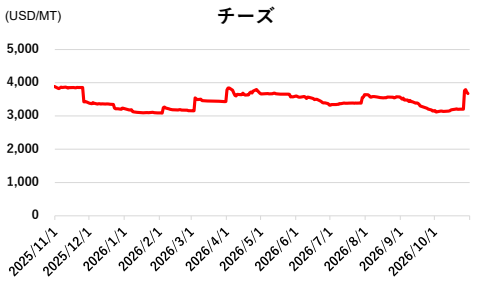
	26年度 上期実績	前年同期比 金額	前年同期比 数量※1	計画比	26年度 下期計画（11月修正）	前年同期比	26年度 通期計画（11月修正）	前期比	26年度 通期計画（5月当初）
プロバイオティクス ヨーグルト	457	+3.5%	+0.8%	+0.9%	522	△3.7%	979	△0.5%	956
ヨーグルト	422	+3.2%	△2.4%	+1.5%	379	+1.6%	801	+2.4%	804
市販・宅配牛乳	406	+0.5%	△3.3%	△3.3%	393	+3.9%	798	+2.2%	819
チョコレート	525	+10.4%	+14.1%	+5.0%	745	+2.7%	1,270	+5.7%	1,231
乳幼児ミルク・流動食	326	△2.1%	—	+0.3%	317	△3.5%	643	△2.8%	649
スポーツ栄養（ザバスミルク含む）	314	+10.9%	+8.2%	+8.9%	247	△2.1%	561	+4.7%	532
BtoB	496	+0.6%	—	+0.6%	553	+1.2%	1,050	+0.9%	1,050
市販チーズ	142	+5.0%	+1.2%	+0.4%	157	+8.3%	300	+6.7%	299
市販アイスクリーム	313	△1.2%	△6.2%	△3.8%	203	△0.5%	516	△0.9%	528

※1 プロダクトミックスの効果も含まれる参考値　※2 収益認識基準は適用していません

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

主要輸入原料相場の動向









（出所）Factset

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

医薬品｜2026年度 上期　事業別営業利益 増減分析

（億円）

	医薬品全体	国内	海外	ワクチン・動物薬
25年度上期営業利益	143	96	41	5
売上増減	+37	+20	+0	+17
薬価改定の影響	+14	+14	―	―
原価の変動	△10	△8	△1	△1
経費等の増減	+29	△15	△4	+48
マーケティング費用等の変動	*△6*	*△6*	*△3*	*+3*
その他費用の変動（内、研究開発費）	*+34 (+37)*	*△9*	*△1*	*+44*
その他（子会社損益など）	△13	△7	+8	△13
26年度上期営業利益	199	100	43	55

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

医薬品｜2026年度 下期　事業別営業利益 増減分析

（億円）

	医薬品全体	国内	海外	ワクチン・動物薬
25年度下期営業利益	161	61	62	38
売上増減	△1	+31	△25	△7
薬価改定の影響	+18	+18	―	―
原価の変動	△7	△3	△2	△3
経費等の増減	△62	△15	△18	△29
マーケティング費用等の変動	*+4*	*△2*	*△6*	*+12*
その他費用の変動（内、研究開発費）	*△66 (△78)*	*△14*	*△11*	*△41*
その他（子会社損益など）	+21	+5	+3	+12
26年度下期営業利益（11月修正計画）	130	98	20	11

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

医薬品｜2026年度 通期　事業別営業利益 増減分析

（億円）

	医薬品全体	国内	海外	ワクチン・動物薬
25年度通期営業利益	304	157	103	43
売上増減	+36	+51	△25	+10
薬価改定の影響	+32	+32	ー	ー
原価の変動	△17	△10	△3	△4
経費等の増減	△33	△30	△22	+18
マーケティング費用等の変動	*△2*	*△7*	*△10*	*+15*
その他費用の変動（内、研究開発費）	*△32 (△42)*	*△23*	*△12*	*+3*
その他（子会社損益など）	+8	△2	+11	△1
26年度通期営業利益（11月修正計画）	330	199	64	66

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

医薬品｜開発パイプライン－１

	製品名／開発コード（一般名）	薬効分類・適応症	ステージ						備考
感染症	OP0595（ナキュバクタム）	カルバペネム系抗菌薬に耐性を示すグラム陰性菌による各種感染症（β-ラクタマーゼ阻害剤）	日本	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	自社創製
			海外	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	
	コスタイベ筋注用	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の予防（12～17歳・自己増幅型mRNAワクチン）	日本	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	提携：CSL Seqirus社（米国）
	KD-414	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の予防（小児・不活化ワクチン）	日本	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	
	KD2-396	百日せき菌、ジフテリア菌、破傷風菌、ポリオウイルス、ヘモフィルスインフルエンザ菌b型、B型肝炎ウイルスによる感染症の予防（6種混合ワクチン）	日本	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	
	KD-382	デング熱の予防（弱毒生4価デングワクチン）	海外	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	
血液・がん	注射用レザフィリン/ME2906（タラポルフィンナトリウム）	子宮頸部上皮内腫瘍（CIN）（光線力学的療法（PDT）用剤）	日本	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	
	ハイヤスタ錠/HBI-8000（ツシジノスタット）	切除不能または転移性悪性黒色腫（メラノーマ）治療薬（HDAC阻害剤）	海外	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	共同開発：HUYABIO International社（米国）
	KD-380（10%液状人免疫グロブリン）	慢性炎症性脱髄性多発根神経炎（CIDP）患者及び多巣性運動ニューロパチー（MMN）患者の急性期治療、維持療法（血漿分画製剤）	日本	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	
	KD-416（血液凝固第X因子製剤）	血液凝固第X因子欠乏症患者の出血傾向の抑制（血漿分画製剤）	日本	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	F	A	自社創製

※「ステージ」は開発品目の進捗段階を示しています。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは臨床試験のフェーズ、Fは製造販売承認申請、Aは製造販売承認取得を表しています。

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

医薬品｜開発パイプライン－２

健康にアイデアを meiji

	製品名／開発コード（一般名）	薬効分類・適応症	ステージ						備考
免疫炎症	レズロック/ME3208 （ベルモスジル）	慢性移植片対宿主病（cGVHD）治療薬（選択的ROCK2阻害剤）	海外	I	II	III	F	A	承認（韓国・台湾・タイ）
		小児慢性移植片対宿主病（cGVHD）治療薬（選択的ROCK2阻害剤）	日本	I	II	III	F	A	
		慢性移植肺機能不全（CLAD）治療薬（選択的ROCK2阻害剤）	日本	I	II	III	F	A	
	IMULDOSA/DMB-3115 （ウステキヌマブ後続品）	尋常性乾癬/関節症性乾癬/クローン病 /潰瘍性大腸炎治療薬（バイオ後続品）	海外	I	II	III	F	A	共同開発：東亞ST株式会社（韓国）／導出先：Intas Pharmaceuticals Ltd.（インド）
			日本	I	II	III	F	A	
	ME3241	自己免疫疾患治療薬（抗PD-1アゴニスト抗体）	海外	I	II	III	F	A	共同研究：神戸医療産業都市推進機構

※「ステージ」は開発品目の進捗段階を示しています。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは臨床試験のフェーズ、Fは製造販売承認申請、Aは製造販売承認取得を表しています。

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

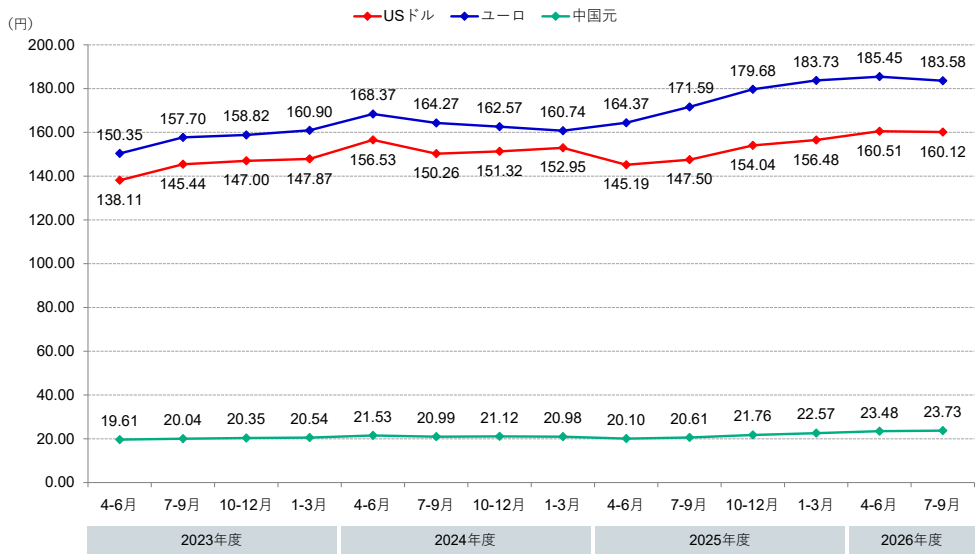
医薬品｜開発パイプライン－３

健康にアイデアを meiji

	製品名／開発コード（一般名）	薬効分類・適応症	ステージ	備考
動物薬	フルニキシン注「meiji」 /MD-22-3002	抗炎症剤（牛、豚、馬）	発売（日本）	2026年1月6日発売
	ME4305	抗菌性製剤（牛）	申請（日本）	自社創製
	MD-22-1001-1	抗菌性注射剤（牛）	申請（日本）	
	ME4406	飼料添加物	開発中	自社創製

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

主要通貨 当社平均レート



26年度計画の為替前提

USD	160円
EUR	175円
RMB	21円

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.

健康にアイデアを

meiji

- 本資料は投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。銘柄の選択、投資の最終決定はご自身でご判断をお願いいたします。
- 本資料に記載された業績見通しなどの将来に関する記述は、当社が現在入手している情報、および合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績などはさまざまな要因により大きく異なる可能性があります。
- 本資料には、監査を受けていない参考数値が含まれます。
- 本資料には、薬品（開発中の製品を含む）に関する情報が含まれておりますが、その内容は宣伝広告、医学的アドバイスを目的としているものではありません。

© Meiji Holdings Co., Ltd. All rights reserved.